おわりに

「生活保護のありのままの姿を伝える本を書いてみませんか」

この本の執筆を打診されてから、間もなく1年が経とうとしています。

本当は2012年の春に出版される予定だったこの本は、あたしの生活にいくつかの激変が起こったことで、随分と遅れてしまいました。

ところが、ちょうど(?)執筆が遅れている間に、すさまじい生活保護バッシングが吹き荒れ、かつてなく厳しい生活保護制度改革が提案されました。

いったい何が問題で、どうしてこんな提案がなされるのか、生活保護利用者は、一体この先どうなってしまうのか…。

あたしは慌てました。何とか一日も早く本を書き上げて、ささやかな実態を知ってほしい、そう思いながらも、なかなか時間をつくりだせず、体力のなさも手伝って、気がつけば木枯らしの吹く季節 … …。

来年度の予算とも関連して、2012年の年末に向けて、生活保護制度に関する議論は活発になってきています。そして、いきなりの年末総選挙です。総選挙の結果、あたしたちはどうなってしまうのか …。

生活保護バッシングはつらかったけれど、これまでになく制度に関する世の中の関心を高める結果にもなりました。「関心」の中には、誤解も偏見もたくさんあると思います。

あたしはこの本で、日頃は報道されることのない「普通の暮らし」を書きました。

「あたしの方がもっと大変よ。やっぱり甘えていると思うわ」というお怒りや、「納税者の気持ちを考えていない」といったお声があるだろうことも覚悟はしています。

そうであればこそ、この本を読んでくださった方々一人ひとりにとって、どんな生活保護制度だったらいいと思うのか、あたしたちと一緒に考えるキッカケになってくれたなら、これほどうれしいことはありません。

何度も「もうダメかも …」と思うあたしを、暖かく根気よく励まし、本の完成に導いて くださったあけび書房の久保則之社長、うれしい推せんの言葉を贈ってくださった雨宮処凛さんに心から感謝いたします。

本来の生活保護制度の在り方を語り、時にあたしの可愛げのない言動もおおらかに受け止め、発言する勇気をくださる生活保護問題対策全国会議のみなさん、あたしが生活保護を利用し始める前から変わらないでいてくれる友人たち、そして何より、生活保護を利用するようになったことで出会った大好きな仲間たちと、全国のまだ見ぬ212万人の生活保護利用者のみなさんへ、この上ない尊敬と感謝をこめてこの本を贈ります。

顔をあげて生きる勇気をありがとう。

2012年11月　ひざ掛けを初めて使った肌寒い秋の日に　和久井みちる